

SHOW-HHEYシネマルーム

★★★★★

ロングデイズ・ジャーニー この夜の涯へ (地球最後の夜晚／ LONG DAY'S JOURNEY INTO NIGHT)

2018年／中国、フランス合作映画
配給：リアリーライクフィルムズ＋ドリームキッド／138分

2020 (令和2) 年3月7日鑑賞	シネ・リーブル神戸
2020 (令和2) 年3月14日鑑賞	シネ・リーブル梅田



監督・脚本：毕赣（ビー・ガン）
出演：湯唯（タン・ウェイ）／黄覺
（ホアン・ジェ）／張艾嘉（シ
ルヴィア・チャン）／陳永忠
（チェン・ヨンゾン）／李鴻
其（リー・ホンチー）

👁️👁️ みどころ

『象は静かに座っている』（18年）のフー・ポー監督と、『凱里ブルース』（15年）に続く本作のビー・ガン監督。天安門事件（1989年6月4日）前後に生まれた「第8世代」が今、産声を上げた！本作注目の「後半60分、驚異の3D・ワンシークエンスショット映像！」とは！？

本作のパンフレットは、称賛メッセージ、特別対談、コラム、監督インタビュー、海外映画評等で盛りだくさん。前半（2D）は記憶、後半（3D）は夢をテーマにした本作はハッキリ言って難解だから、それらを読み込むことが不可欠。だって、監督自身「私はいつも自分の映画は理解しづらいと言っています。」と認めているのだから・・・。

2人のヤクザ風の中年男は素人ながら、高倉健ばりにカッコいいので、その男臭さをしっかりと。他方、一人二役で登場する2人の女優は大女優。とりわけ、前半（2D）はドレッシーな濃い緑色のワンピース姿で、後半（3D）はおかつ頭のスポーティーな姿で登場する、美人女優タン・ウェイに注目！

私は1回目は寝入ってしまったが、それはダメ。2回目はスクリーン上で展開される記憶と夢の世界を、原題、邦題、英題の意味を噛みしめながら、しっかり鑑賞！ 結局、ようわからん！くれぐれもそんな感想で終わらないように。

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

■□■ビー・ガン監督に全世界が注目！第8世代が産声を！■□■

2018年のベルリン国際映画祭フォーラム部門国際批評家連盟賞と第1回最優秀新人

監督賞スペシャル・メンションのW受賞した『象は静かに座っている』(18年)の胡波(フー・ボー)監督は、残念ながら同作の完成直後に、29歳の若さでこの世を去った(自殺した)。私は同作について、①このタイトルは？冒頭とラストの暗示は？満州里とは？、②この暗さ！この陰影！この構図！このこだわり！、③同じ底辺を描いても、本作は『カイジ』と大違い！、④すべてを長回しの会話劇で！俳優の力量がくっきりと！等の小見出しで詳細な評論を書いた(『シネマ46』掲載予定)。そして、とにかく234分という長尺の中に詰め込まれた彼の激しいパッションに驚かされた。その圧倒的なエネルギーは『象は静かに座っている』というタイトルとは正反対のものだったから、鑑賞後にぐったり疲れたのは当然だ。中国にはすごい若手監督が登場してくるものだと感心していると、今度はビー・ガン監督と出会うことに！

彼が長編第1作『凱里ブルース』(15年)を発表したのは2015年。そして、日本で初公開された彼の長編第2作となる本作のチラシには「映画の後半60分間、2Dから3Dへ、さらに一発勝負のロングショット撮影へ。革新的な映像表現が、あなたを新たな夢幻映画体験へと導く。」と書かれ、パンフレット(11頁)には、「後半60分、驚異の3D・ワンシークエンスショット映像！」と書かれている。「天安門事件」と同じ1989年6月4日生まれのビーガン監督は、1988年生まれのフー・ボー監督と同世代だが、「天安門事件」の前後に生まれた彼らが、今なぜこんなに成長し、ものすごい映画を次々発表しているの？

もっとも、テレビドラマの延長のような、説明調で誰にでもよくわかる近時の邦画と違い、本作は難解！都市法は複雑かつ難解だが、『凱里ブルース』も本作も抽象的かつ難解。それは、抽象画を鑑賞するのが大変なのと同じ理屈だ。そのため、私は1回目に観た時は爆睡してしまったが、2回目はしっかり観賞。そして、パンフレットも熟読したうえ、かなり性根を入れてこの評論を書いたので、しっかり読んでもらいたい。

■□■パンフレットの熟読は不可欠！『キネマ旬報』も！■□■

本作のパンフレットの冒頭(4～7頁)には、「各界著名人から届いた称賛メッセージ」があり、日本人の椎名林檎氏(音楽家)、松本大洋氏(漫画家)、坂本龍一氏(音楽家)、塩田千春氏(美術家)らの他、中国の陳凱歌(チェン・カイコー)監督や李安(アン・リー)監督らの称賛メッセージが並んでいる。また、パンフレットには、対談では、深田晃司×ビー・ガン×市山尚三の3人による「特別鼎談企画」がある他(12・13頁)、丸山健志×ビー・ガンの「特別対談企画」もある(14～17頁)。また、コラムでは、ピエール・リシャルド氏の「中国の第8世代」(18頁)があり、そこでは「そう、第8世代は、確かに、たった今、産声をあげた。」と書かれているので、それに注目！

また、エリック・コーン氏の「60分長回しの3D映画は、2018年カンヌ映画祭の啓示である。」と題する批評(19頁)もある。さらに、パンフレットの「中国第8世代の

アンファンテリブル——ビー・ガン監督インタビュー」(20～23頁)は、ウォン・ムヤン氏をインタビュアーとする極めて突っ込んだ内容になっている。さらに、海外映画評(26～27頁)もある。

これらを読み切るのは大変だが、ビー・ガン監督を理解し、また本作を理解するにはそれは不可欠だ。なお、『キネマ旬報』3月上旬号も「中国映画が、とんでもない!」の第1章でビー・ガン監督を特集しているので、これも必読!

■□■原題は?英題は?邦題は?同名演劇との関係は?■□■

本作の邦題は『ロングデイズ・ジャーニー この夜の涯てへ』だが、原題は『地球最後の夜晚』。ビー・ガン監督のインタビュー(20頁)によると、これは、ロベルト・ボラーニョの短編小説“Last Evenings On Earth”(短編集『通話』に収録)からきているようだ。それに対して、英題の『LONG DAYS JOURNEY INTO NIGHT』は、ユージン・オニールの『夜への長い航路』の原題の影響を受けているようだ。それを前提とした、インタビュー、ウォン・ムヤン氏の「夜と旅の主題は単なる類似なのでしょうか?」との質問は鋭い。

それに対して、ビー・ガン監督は「(笑) タイトルと配役の名前を選ぶことは、私には常にちょっとした挑戦です。」と答えたいようで、「大切なことは、映画の中の配役の名前が実在の人物の名前であることです。例えば、人気歌手の名前のように。私が選択する題名というのは、映画の精神にそぐうものです。」と答えている。この「Q&A」は表面だけでもそれなりに理解できるが、本作で湯唯(タン・ウェイ)が演じるワン・チーウェンなる女性が実在の人気歌手の名前と同じであることを考えると、実に奥が深い。したがって、このインタビュー最初の「Q&A」だけでも、しっかり吟味する必要がある。

もっとも、私はインタビュアーが質問しているロベルト・ボラーニョの短編小説“Last Evenings On Earth”も、ユージン・オニールの『夜への長い航路』も知らないから、それ以上突っ込んで理解することはできないが、さて、あなたは?

■□■前半(2D)のテーマは記憶!すると後半(3D)は?■□■

本作のチラシには、「映画史上初めての試みである、2Dで始まった上映の途中から3Dへ、そしてそこから続く一発勝負のワンショット撮影へ。」と書かれている。そして、本作の主人公であるルオ・ホンウ(黄覺(ホアン・ジェ))が、本作の中盤、映画館の座席に座りおもむろに3Dメガネをかけると、スクリーンは一気に3Dに変わるらしい。そのため、本来ならその時点で観客も3Dメガネをかけることが要請されるが、実は大阪での本作の上映は2Dのみ。しかも、現在は新型コロナウイルス騒動のため、3Dメガネは使用不可とされているらしい。そのため、エリック・コーン氏の批評では「そこから、驚異的な完全3D映画60分のワンシークエンスショットへと突入していくのだ。」(19頁)と書か

れているが、残念ながらそれを味わうことはできなかった。

それは仕方ないが、本作前半（2D）のテーマは記憶。2019年の第92回アカデミー賞で作品賞、監督賞等4部門を受賞した韓国のポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）は、後半からクライマックスにかけては「ネタバレ厳禁！」とされていたが、中盤までのストーリーはパンフレットでも丁寧に解説されていた。それに対して、本作のストーリーは、「ルオ・ホンウは、何年もの間距離を置いてきた故郷・凱里へ、父の死を機に帰還する。そこでは幼馴染 白猫の死を思い起こすと同時に、彼の心をずっと捉えて離れることのなかった、ある女のイメージが付き纏った。彼女は自分の名前を、香港の有名女優と同じワン・チーウェンだと言った。ルオはその女の面影を追って、現実と記憶と夢が交錯するミステリアスな旅に出る・・・。」と書かれている（8頁）だけだから、それだけでは何のことかサッパリ・・・？

もっとも、そんなストーリーだけでも、前半（2D）のテーマが記憶だと言われると、なるほど、なるほど・・・？すると、後半（3D）のテーマはきっと夢・・・？なるほど、なるほど。

■□後半（3D）のテーマは、きっと夢！？■□

ビー・ガン監督の長編第1作『凱里ブルース』のテーマは旅で、そこではバイクとトラックが走る姿が印象的だった。しかし、本作後半（3D）のテーマが夢だとすると、ビー・ガン監督はそこでどんな夢を描くのだろうか？

インタビュー（21頁）で、ビー・ガン監督は、「しかし“映画は理解しやすいものでなければならない”と思いませんか？（笑）」の質問に対し、「私はいつも自分の映画は理解しづらいと言っています。」と答えているからビックリ！とは言っても、これは半分冗談で、「しかしそれは本音ではありません。みなさんにはそれを感じる必要があるのです！私が当たり前の説明的なシーンを撮らないのは、それは彼らが私を怠け者に行っているからです。あなたがご自身に言い聞かせてみてください、『私は筋の軸を持っている、だからそれに準じるだけ。それって簡単でしょう？』。しかしそれらの説話的なシーンがなければ、あなたはそのストーリーラインを把握しようと努力するはずですよ。もっと言えば、それはあなたにとって素敵なサプライズにもなるのです。」と答えているからすごい。つまり彼は、観客がそこまで努力することを要求しているわけだ。

しかし、本作後半（3D）で主人公のルオはどんな夢を見るのだろうか？また、『凱里ブルース』と同じように、ルオが夢の世界を辿る旅はどんな風に展開していくのだろうか？

■□グリーンブックとは？無名ながら2人の中年男に注目！■□

2018年の第91回アカデミー賞では、白人と黒人のおじさん2人のロードムービーである『グリーンブック』（18年）が作品賞、脚本賞、助演男優賞の3賞を受賞したが、

同作のタイトルになっている「グリーンブック」とは、1936年から1966年までニューヨーク出身のアフリカ系アメリカ人、ヴィクター・H・グリーンにより毎年作成・出版されていた、黒人旅行者を対象としたガイドブックのことだった（『シネマ 43』12 頁）。それと同じように、本作のパンフレットの表紙には、「緑色書（Green Book）」と書かれているが、これは一体ナニ？それは、「記憶」をテーマにした本作前半（2D）の中で「幼馴染みの白猫」の記憶や、「かつての恋人ワン・チーウエン」の記憶と共に登場するので、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。

他方、本作では無名ながら2人の中年男に注目したい。その1人目は、前半（2D）で、グリーンブックを手がかりに、幼馴染みの白猫（李鴻其（リー・ホンチー））と、かつての恋人ワン・チーウエンの記憶をたどっていく中年男・ルオ・ホンウ。このルオ役を演じる黄覺は、Introduction（10 頁）によると、「日本ではほぼ無名に等しい。その長身を生かして、ダンサーからモデルへ、そして俳優に転身した。」と紹介されている。寡黙だが、一見ヤクザ風で男臭い雰囲気は高倉健そのものだから、中国で一気に人気が沸騰したのもうなずける。もう1人は、『凱里ブルース』で主役のチェン役を演じた陳永忠（チェン・ヨンゾン）。彼は本作でルオと対立する地元のヤクザ、ジョ・ホンユエン役を演じている。その出演シーンは少ないが、存在感はバッチリ！強いインパクトを与える演技力は大したものだ。とりわけ、カラオケ店の中でタバコをふかしていたジョが、ゆっくり立ち上がり流れている曲に合わせて軽くダンスをはじめたうえ、更にマイクを持って歌い始めるシーケンスは何ともカッコいい。単なる中年のヤクザというだけではあのステップは踏めないし、あの悩ましい腰の振り方もムリなことは明らかだ。ちなみに、この陳永忠はビー・ガン監督の実の叔父で、監督が幼い頃には刑務所にいた時期もあり、渡世人であったにもかかわらず、ビー・ガン監督の崇拜の対象であったというから、それもビックリだ。

■□■ 2人の大女優に注目！張艾嘉と湯唯 ■□■

前半（2D）、後半（3D）を通して本作の主人公ルオを演じるのは、無名の俳優・黄覺だが、本作に登場する2人の女優、湯唯と張艾嘉（シルヴィア・チャン）は2人とも大女優。とりわけ、張艾嘉は直近の『あなたを、思う。』（15 年）、『妻の愛、娘の時』（17 年）（『シネマ 42』178 頁、『シネマ 44』52 頁）では監督として活躍しているうえ、『山河ノスタルジア』（15 年）（『シネマ 38』220 頁、『シネマ 44』246 頁）、『ブッダ・マウンテン〜希望と祈りの旅』（10 年）（『シネマ 31』127 頁、『シネマ 34』231 頁）では女優として活躍中だ。

他方、本作のチラシやパンフレットに濃い緑色のドレス姿で登場している女優は『ラスト・コーション／色・戒』（07 年）の、あっと驚くセクシーな女スパイ役で、彗星の如くデビューしたタン・ウェイ（湯唯）だ（『シネマ 17』226 頁）。彼女は同作で、台湾金馬獎の最優秀新人賞などの多くに賞を受賞したものの、「政治的な内容と性描写の作品に出演し

た」との理由で中国国内から非難を受け、中国映画界からほぼ抹消されたかたちになっていたらしい。しかし、08年に香港の市民権を獲得したことによって、2010年にはジャッキー・チェンと共演して女優に復帰しピーター・チャン監督の『捜査官 X』(11年)『シネマ 28』165頁、『シネマ 34』445頁)に出演した。また、『レイトオータム』(10年)に出演した縁で韓国のキム・テヨン監督と結婚し、子供も生まれているようだ。この湯唯を高く評価している私は、『捜査官 X』の評論で「お帰りタン・ウェイ！今後の活躍に期待！」と書いたが、ビー・ガン監督がそんな湯唯を本作に起用してくれたことに多謝！本作では、そんな2人の大女優に注目！

■張艾嘉が一人二役なら、湯唯も一人二役！■

張艾嘉は本作で、白猫の母親役と赤毛の女の一人二役を演じているが、湯唯も一人二役。すなわち、前半(2D)はワン・チーウェン役で、後半(3D)はカイチン役で、きっちりルオの相手役をこなしている。『ラスト・コーション／色・戒』では大胆なヌードシーンが見どころだった湯唯だが、本作前半(2D)では、「緑色書」と題されたパンフレットと同じ、濃い緑色のワンピース姿で長い髪の彼女に注目！ビー・ガン監督は、本作に台湾のヤオ・ホンイー、中国のドン・ジンソン、フランスのダーヴィッド・シザレという3人の著名な撮影監督を招いて撮影しているが、ビー・ガン監督の演出と彼ら3人のカメラの前で、とりわけ前半(2D)での彼女の濃い緑色のワンピース姿は印象的だ。裸足で水の中に入っていくシーンあり、いきなりルオから頭をつかまれるシーンあり、不規則な体位でキスを交わすシーンあり、とそのポーズはいろいろだが、モデル顔負けのその撮影風景をしっかり確認したい。

前半(2D)で、彼女はしつこくかつ古くさい手法で名前を尋ねてくるルオに対して、自分の名前はワン・チーウェンだと名乗っていたが、それって本名？そんな湯唯が、後半(3D)では、短髪でジーパン姿というスポーティーな服装の女・カイチン役で登場する。ルオはこのカイチンに対しても、「君は昔の恋人に似ている」と声をかけるのだが、誰が聞いてもこりゃいかにも陳腐で見え透いたセリフ。ビリヤード場の管理人(?)をしている女カイチンは、果たしてそんな風に言い寄ってくる男ルオに、どこまでついていくのだろうか？

張艾嘉が一人二役なら湯唯も一人二役なので、前半(2D)と後半(3D)をしっかりと対比しながら、2人の大女優が見せる一人二役の魅力をしっかり味わいたい。

■ダンマイという町はどこに？その撮影場所は？■

『凱里ブルース』でも、後半に主人公が辿り着いた町は「ダンマイ」という名の架空の町だったが、それは本作も同じ。つまり、本来なら観客もルオと共に3Dの空間に入り込み、その映像の中で映し出される後半の舞台も、「ダンマイ」という架空の町だ。もともと、

後半もその最初は、ルオが暗くて狭い洞窟をくぐり抜けていっただけだから、そこから一体何が始まるの？そう思っていると、そこでまだ幼い白猫（羅飛揚（ルオ・フェイヤン））と出会ったうえ、白猫から挑まれるルオはわけのわからないままにピンポンの試合をやり、それに勝ったルオは広大な空間に移動させてもらったうえ、これを回転させれば空を飛ぶことができるという魔法のラケットをプレゼントしてもらうことに。他方、ルオの周りにはなぜかいつも美女がおり、前半のそれはワン・チーウェンだったが、後半も狭い洞窟から逃れ、ビリヤード場に到着したルオは、そこでワン・チーウェンとよく似ている美女・カイチンに出会うことになるので、それに注目！ちなみに、『アラジン』（19年）（『シネマ45』未掲載）では、魔法の絨毯に乗りばどこにでも自由自在に飛んでいけた。また、米米CLUBのカールスモーキー石井が歌って大ヒットした『浪漫飛行』（90年）では、「トラंक1つだけで浪漫飛行へ」行き、「In The Sky」していた。それに対して、本作の夢の中で見せるルオとカイチンのはじめての飛行体験は如何に？

本作後半（3D）の舞台となる架空の町「ダンマイ」は、『凱里ブルース』の後半で見た「ダンマイ」とは全然異質な町で、舞台上で素人のど自慢大会の勝ち抜き戦をやっている（？）会場はバカ広い。深田晃司×ビー・ガン×市山尚三の特別鼎談企画によると、その撮影場所は、もとはソ連と中国が開いた水銀の鉱山で、その後刑務所として使われ、今は廃棄されているところらしい。ビー・ガン監督は『凱里ブルース』の準備中にそれを見つけており、どう撮影するかを想像しながら本作の脚本を書いたそう。なるほど、そうだからこそ、『1917 命を懸けた伝令』（19年）で観たロングショット撮影と同じように、すべてが計算し尽くされた見事な撮影になっているわけだ。

前半（2D）のテーマが記憶だったのに対し、後半（3D）のテーマは夢。それを、こんなバカ広い空間の中で、自由にかつタツプリと楽しみたい。

2020（令和2）年3月19日記